

# 油浜研究所

中野  
劇団

# 油浜研究所

作・中野 守 (中野劇団)

登場人物

あらいらはま  
油浜博士

うりやま  
瓜山助手

研究室。博士がいる。助手が勢いよく入って来る。

助手 油浜博士！

博士 おお、どうした？ 瓜山君。久しぶりだな。

助手 これを見て下さい！

博士 何だね、これは。

助手 何だと思う？

博士 いきなりため口か、瓜山君。これは、ポラロイドカメラじゃないのかね？

助手 私の自作なんです。できたばかりで。

博士 おお！ まじで！ すげえ！ やっべ！ 腰抜けた！

助手 いやいや、こんなところで驚かないで下さいよ！

博士 凄い凄い、びっくりだ。何がびっくりってこれ作るために一ヶ月も有休取った

のかってことにびっくりだ。

助手 聞いて下さい油浜博士。一見ただのポラロイドカメラですけど、実は特別なカメ

ラなんです。

博士 そうか、これが特別なカメラか！ おお！ すげえ！

助手 ああもうめんどくせえ！ どう特別なのか聞いて下さい！ どう特別なのか！

博士 え？

「え？」じゃなくて。油浜博士、今日どうしちゃったんですか？ 今日、変ですよ。

博士 いやあ、イメチェン？

助手 凄い会話しづらいです。

博士 そうそう。そうなんだよ。ほら、いつも君と一緒にいると、真面目にやってる自

分が損してる気がして。人ってどういう風に振る舞われると会話しづらいかの研究中だったんだ。

助手 そんなことはどうでもいいですけど、博士、一体どう特別なのか当ててみて下さいよ。

博士 ほら来た！ そうくると思った！ そうだな。うーん。シャッター押すところから（レンズから）パンチが出てくるとか。

助手 違います。

博士 自分の方に出てくる？

助手 ええ？ もう、そんなもん作るのに一ヶ月も休み取らないですよ。

博士 何にしても無断で一ヶ月も休み取らないでほしいんだけどね。

助手 どう特別だと思いますか？

博士 うーん、何だろうなあ。……材質が凄いい固いとか。逆かな？ 見た目に反してもちもちしてるとか。触ると凄くもちもちしてて癒されるとか、材料を一切使わずに作ったとか。

助手 カメラの機能に触れて下さい。

博士 ああ、そっか。

助手 「ああそっか」？ だからね、普通のカメラは写真撮るわけですけど。

博士 普通はそうだよな！

助手 ええ。このカメラは、特別なものを写すことができます。

博士 へその緒とか、成人式の写真とか。

助手 それだと特別なものを写すって決めただけの普通のカメラじゃないですか。違い

ますよ。普通だったら写せないものが写せるんです。何だと思えますか。

博士 それは作った君の方がよくわかっているんじゃないのかな。

助手 ええ、わからなくて聞いているんじゃないんです。ごんだけ興味ないんですか！

博士 普通撮れないもの？

助手 そうです。

博士 パンチが出てきてびっくりした人の顔とか？

助手 それ別に撮ろうと思ったら撮れるじゃないですか。

博士 では、君の発明は、作ろうと思っても作れない物を作ったというのか？

助手 そうなんですよ。

博士 作ろうと思っても作れない物を作ったっていうのはおかしな話だよ。わかっ

た。それこそが特別ってことだよ。そうだろう？

助手 ええだからどう特別なのかを答えろって言ってるんですよ。

博士 そうだろう、そんな気がしてたんだが。

助手 さっきから会話が三步進んで三步下がってるんですけど。

博士 よし降参だ。

助手 少しは考えて下さいよ。

博士 いやいや、ここまで考えても出てこないんだ、降参だ。

助手 ……実はこれ、未来を――

博士 わかった！ わかった！ 未来を写すカメラ！

助手 ……ええそうです！ このカメラで未来を写すことができます。

博士 へえ……。

助手 まだ試作段階ですけど、早く博士に報告したくて、有休返上して来たんですよ。

博士 まだ休むつもりだったのか！ しかし、それって理論上不可能だろう？

助手 それを可能にする方法を閃いたんですよ。世紀の発明なんですよ。

博士 それが本当だったら世紀の発明じゃないか！ よし説明してくれ。

助手 未来を写すって言ってもまだ試作段階でして。

博士 そっかぁ畜生！

助手 徐々に改良を重ねて、今漸く、五秒後の未来まで写すことが可能になりました。

博士 おお、何かりアルだな。一年後とかだと嘘くさいけど、実際にそんなカメラを作

れるとしたら、たぶん、最初はそんなもんはずだ。

助手 これが昨日とった写真です。

博士 ほう。時計が写ってるな。

助手 ええ。カメラの撮影時刻と見比べて下さい。時計の方が五秒進んでるでしょ？

博士 おお。……もうちょっと確実な証明ってできないかな。

助手 と、言いますと？

博士 これ、時計が進んでるとかではないのか？

助手 いえ、時刻はきっちり合わせました。

博士 うん、そうなんだろうけど、その辺を証明してもらわないと。

助手 どうして？

博士 どうして？ どうしてときたか。やっぱり君には敵わないなあ。いや、だから、時

計を進めてるかも知れないから。

助手 進めてないですよ。僕そういうことするの嫌いですから。

博士 うん、そうだと思うよ、そうだと思うけどね。君の誠実な人柄を知らない人がこ

の写真を見たって俄に未来を写すカメラとは信用できないだろ。胡散臭いという

言葉はこの写真のためにあるようなもんじゃないか。

助手 別に信じようとしらない人に信じてもらいたいとは思いませんけど。

博士 うん、まあそうかもしれないけど、ほら、これはこれこれこうだからこうで間違

いないってきっちりしたものがないと。とりあえず今、撮ってくれないかな。そ

したら少なくとも僕は信じる事ができるだろ？

助手 つまり、今は信じてない？

博士 信じてるよ、信じてるけどね、うーん、もっと信じられると思うから。

助手 ということは信じてないってことですよ。信じられるか信じられないかは0か

1のもですよ。七割信じてるとかって、三割信じてないことになって、その

三割信じてないっていうのがある限り、七割信じてるっていうのは全くもって無



意味なことじゃないですか。

博士 取りあえず見せてよ。

助手 まあ、別にいいですけど。取りあえずじゃあ説明しますね。一応資料を用意しましたので、ざっと目を通してもらえますか。

博士 いや、撮ってくれた方が早いと思うし。

助手 あ、そうですね。これ、ちょっと写真を撮ってから出て来るまで一分くらいかかるんですけど、いいですか。

博士 えと、五秒の未来までしか撮れないんだよね？

助手 五秒後まで撮れるようになったんです。

博士 うん、ごめん、言い方が悪くて。で、現像に一分かかるんだよね？

助手 いえ、紙が出て来るまでが一分です。そこに絵が浮かび上がって来るまでさらに三分ちよいかかります。

博士 そんなにかかるの？

助手 はい。

博士 まあ、最初だからね、だんだんあれだよね、先の時間とかも撮れるようになって

くるよね。

助手 それは難しいかと。

博士 え？

助手 たぶん、計算上、ある部品の小型化を図ることができれば、次の日の写真とか、一年後の写真とかも撮れるようになるかと思うんです。ただ、その分、比例して現像までの時間も長くなる計算で。

博士 そうなの？

助手 ええ、計算上は。

博士 その計算を乗り越えることはできないの？

助手 ええ。科学の限界です。

博士 君の限界じゃなくて？

助手 イコール科学の限界です。

博士 じゃあ、これ改良していても、あんまり使い道ないってことだよな？

助手 でも未来を写せるって事実には変わりないわけだし。学会に発表しましょう！

博士 うん、まあそうだよな。確かに歴史的な発明だよ。……でもうち、心理学研究所

だからなあ。  
……だから？  
……ええ？

終わり。